

# 中国における小泉八雲

西 脇 隆 夫\*

Lafcadio Hearn in modern China

Takao NISHIWAKI

## はじめに

ここで「中国」というのは、Chinaのことである。あらためてこんなことを述べるのは、小泉八雲が住んでいた松江が日本では「中国」地方に位置するからである。では小泉八雲が中国に行ったかといえば、八雲自身が中国に行ったことがないの言うまでもないだろう。

この小論では、近代中国においてラフカディオ・ハーン=小泉八雲がどのように紹介されていたのかを見ることを目的としている。さらに、その紹介のされ方が日本の場合とはどのように違うのか、その紹介のされ方に西洋文化に対する中国の関心の特色がどのようにかがわれるのか、ということの問題にしたいと考えている。

中国において小泉八雲はどのように紹介されていたのか、私がこのことに興味を持つようになったのは、香港に在住していた文学者の葉靈鳳が書いた「再読の書」というエッセイの冒頭で、次のような言葉を読んでからである。

以前に小泉八雲は、一遍だけ読んで再読

できないような本を買ってはならない、と人に勧めたことがある。

私は八雲にこのような発言があるのを知らなかったし、中国人の中にも小泉八雲を読んでいる人がいると知って驚いた。そして、葉氏のような読書家だからなのか、それとも近代中国では一般によく読まれていたのだろうか疑問に思った。

葉靈鳳自身は、そのエッセイで八雲についてこれ以上はふれていないし、またその『読書随筆』の中でも八雲の作品について感想を述べているわけではない。

ところが、同じく香港在住の文学者黄俊東のエッセイを集めた『書話集』の中には「文壇の伝奇的な人物小泉八雲」という文章が収められている。

黄氏は先ず1850年にギリシャのイオニア島で生まれたラフカディオ・ハーンと1904年に東京で死んだ小泉八雲が同一人物であると紹介してから、次のように述べる。

小泉八雲としての彼の生命は、わずかに14年に過ぎなかったが、文壇における盛名と栄光はすべてこの時期に作られたものである。だから小泉八雲としての時代はハーン的一生で最も重要で輝かしかった。このように優れた文学の奇才が、その生涯にお

\* 島根大学法文学部中国語学・中国文学研究室  
Shimane University, Matsue, 690 Japan.

ける最後の10年間になって、どうして豊富で多彩な光を放つことができたのだろうか？それはハーン時代の失意の人生と文学に対する情熱の結果であろう。

このような指摘の後に、黄氏は厨川白村の文によって、八雲の姓名についてふれているが、これは「小泉八雲逸聞」として以前にも紹介されたものである<sup>3)</sup>。

次に、八雲の家系と血統は文学者の中でも複雑だと、その父母について述べた後に、八雲の文学の特色を次のようにとらえる。

このように混じり合った血統に加え、ギリシャに生まれ、アイルランドに育ち、フランスに学び、アメリカで成長し、西インド諸島を旅し、各地を歩き回った旅人が最後に蓬萊の国に来て日本の婦人をめとり日本人になった。このような変化の多い一生では、その性格、情緒、気質などがあのように特殊で奇異であるのも当然であろう。彼の文学作品では、その異国情緒がフランスの作家ロティよりも強烈である。八雲の追求したユーモア、幻想や漂泊の思いは他の人とだいぶ異なっていた。

さらに、父母の離婚、カトリック系学校への入学、友人による左眼の失明、教会に対する嫌悪、16歳の時にロンドンで働き、19歳の時にアメリカに行って各地を放浪したことなどを記し、その後、ハーパー社の特派員として日本に来て、松江で結婚したことや妻に英語を教えなかったことなどにふれる。

その著作について、『東の国から』など日本で書かれた作品は、文章がきらびやかで美しく、題材は妖怪変化や異国情緒を賛美していて魅力的であり、「彼の作品が今日でも文学を愛好する読者に歓迎されていることが分かる」と述べている。

また、大学の講義をまとめた4冊の本を紹介し、「この文学評論は早くに名著となっている」と言い、その「情緒本位の文学教授法」が文学教育の特色となっている、と述べる。

八雲の風貌についても、やはり白村の文章を引用して紹介するように、黄氏の文の大部分は厨川白村の「小泉八雲先生」の一文と後に紹介する朱孟実の文章を参考にしていることは明らかであろう。

## I. 八雲の生涯と文学の紹介

樊仲雲の「小泉八雲」は、近代中国においてかなり早い時期に小泉八雲の作品と生涯を紹介した文章ではないだろうか<sup>4)</sup>。ただし、これが最初の文章であるかどうかはまだ確認できないでいる。

この文章は3章からなり、第1章では先ず『東西文学評論』の末尾に収められている「日本の詩瞥見」から引用した後に、インドの詩人タゴールが日本で行った講演の一部を紹介して、次のように述べる。

タゴールの見解は、私が冒頭で引用した小泉八雲が「日本詩歌一瞥」の中で言っていることと同じである。これから、東西の民族と文明がいかに異なろうとも、同じく地球上の人類であることにより将来は互いに理解し、一つに結び付く日があるだろうと、私たちは知ることができる。キプリングの言う「東は東、西は西」という見解は皮相的な観察にすぎない。

では、東洋と西洋はどうすれば互いに理解できるのだろうか。最も良い方法は文学によってその民族の生活を理解することであり、小泉八雲こそ東洋文明を慕い、東洋の文学を理解した人物である、と指摘する。

一般に中国や日本に一度だけ旅行して東洋通と自認する人と異なり、小泉八雲は東洋の文学に親しみ、東洋人として生活でき、東洋文明の精神を徹底的に理解できたので、著作の大部分は日本人の内部の生活を美しい文章で表現できたのである。

第2章はその生涯について、要領よくまとめている。

先ず、父母の出身と八雲の生年月日を記してから、その生地イオニア島は南ヨーロッパにあって、空気がきれいで暖かい楽園であり、その原住民は勤勉で素朴、迷信を信じ感情が豊かである。八雲の性質はそこから大きな影響を受けたのである。

次に、父の故郷ダブリンに行き、両親が離婚したことを述べる。ただし、それ以前に英国の学校へ入ったことと片目の失明についてはふれていない。

19歳でアメリカへ渡り、ニュー・ヨークからシンシナティに行き、生活のために苦勞して働き、コマーシャル・レポート社に勤るが、寒冷の地であることからニュー・オリアンズに移って、「デモクラット」の文芸欄の編集長となり、フランスの近代文学の翻訳などを始める。

その頃、ニュー・オリアンズで開かれた万国博覧会を見に行き、日本人の服部一三と知り合い、日本の歴史、宗教や文化の事情を聞いたことが、後に日本へ来る動機となった。

1887年に西インド諸島のマルティク島へ行き、1890年に日本へ来て、その後は松江、熊本、神戸、東京で暮らしたようすを述べている。

第3章は、八雲の著作を三種類に分類してその書名を列挙している。

まず、翻訳については、ゴッティエの『クレオパトラの一夜その他』など三冊を挙げてから、次のように評価する。

フランスの「シルヴェストル・ボナールの罪」のような翻訳は、その訳文が優美で流暢であるため、フランス語に対する彼の素養をうかがえる。そして、彼の作品もその筆致が繊麗であるのは、フランス文学から大きな影響を受けており、これは衆知のこととなっている。<sup>5)</sup>

第二種の作品として、『異文学遺聞』など記事、随筆や創作など21冊の書名を並べている。

彼の第二種の作品、『心』、『東方より』、『日本、その解釈』、『怪談』、『日本雑録』、『骨董』、『日本瞥見録』、『仏陀その拾遺』と『影』など、多くは秀麗な筆致で日本人の生活、東洋人の精神と美を描写して西洋人に紹介した作品である。だから、東洋文明の解釈者と言うのにふさわしい。<sup>6)</sup>

しかし、彼は同時にその情緒本位の文学教授法とおもしろい講義で、西洋の思想と文学を日本の学生に正確に紹介した、東西文明の媒介者であると言っても言いすぎでなからう。けれども、このような使命を全うできたのは、明快で流暢な文章と博識のためだけでなく、世界人としての彼の人格によってもいるのである。彼は英国に属さず、米国にも属さず、もちろん全くの日本人であるとは言えない。その心中には国土や国民に執着する偏見はなく、全世界をあまねく遊歴し、一切の美に対して同情し同感し、享楽を求める人である。彼は西洋人以上に西洋を理解し、日本人や東洋人以上に日本や東洋を理解した。このようにロマンティックな人は世界でもおそらく彼一人だけであろう。<sup>7)</sup>

第三種は文芸批評として、『文学の解釈』など四冊の講義集と『東西文芸評論』を挙げて、こう説明する。

大部分は、東京大学の十余年間における英文学の講義である。彼はその豊かな天才と卓越した独創性を発揮し、その特別な趣味的鑑賞を基本的な批評の基準として講義を行った。<sup>8)</sup>

コロンビア大学の英文学教授アースキンが本書の校訂者である。彼はその序文で『英文の文芸評論について言えば、コウルリッチ以後の第一人者であり、正直に言って、ある点ではコウルリッチも及ばないところがあるようだ』と述べている。この言葉は褒めすぎであるが、彼の文芸評論はコウルリッチの『シェークスピア講演』と同一系統に属していることはまちがいない事実である。<sup>9)</sup>

これらの書物は北欧の伝説、英国の古謡を論じ、並びに沙翁からキプリング、メレディスに至る文壇の諸星を品評し、この他に彼がふだん愛読するフランスの創作から近代のモーパッサン、ボードレールなどの作品を紹介している。三、四十年前に彼がこれらの作品を極東の読書界に紹介し、西洋の新しい思想の傾向をあらかじめ示していたのはなんと卓越した識見であろう！<sup>10)</sup>

もとより、このような題目を論じた英米の評論はたいへん多いが、彼のような思想家、批評家として独特のものをそなえた鑑賞眼に映じた純主観的な批評は、英米の評論界では未だ見なかったものである。<sup>11)</sup>

彼は東洋趣味の鑑賞眼で古今の作品に目を通し、その議論には西洋の文学研究者がまだ考えなかったことが多い。<sup>12)</sup>

彼の文章は明白で分かりやすく、きわめ

て理解しやすい。もともと、彼は詩文だけでなく、難解な哲学思想も難渋な語句を用いない。私は評論書の中に彼のように分かりやすい文章を用いたものを求めたいが、おろくないであろう。要約して言えば、八雲の本は私たちが文学を研究するのに最も良い入門書であるため、読者に紹介するものである。<sup>13)</sup>

以上、長々と引用してきた八雲の著作に関する指摘は、じつは樊仲雲が厨川白村の文をほとんどそのまま使用してまとめたようである。ただし、伝記の部分は田部重治氏の伝記にない記述もあるように、中国語に訳出されていた資料からなのか、日本文の資料からなのか、英文の伝記からなのか、その出典は今のところ不明である。

当時、樊仲雲は商務印書館の編集者であった。その八雲に関する紹介は編集者らしくすでに発表されていた資料を巧みにつないでまとめたものと言えよう。

八雲についての文章を発表している「小説月報」には、従予の筆名で「小泉八雲論詩」や「小泉八雲逸聞」などを載せている。これらも日本語の資料から訳出したのかもしれない。

朱孟実の「小泉八雲」では、先ず八雲の書簡、講演、日本を描いた小品を読めば、彼の魅力に引かれ、文学に対する興味が強まる、と述べた後に、その両親の国籍にふれて、次のような八雲の作品の魅力の由来を示そうとした。<sup>14)</sup>

小泉八雲の個性を理解しようとするなら彼の血統を記さないわけにはいかない。ギリシャ人の鋭敏な審美力、ラテン人の強烈な感覚と放浪の情緒、アイルランド人のユーモア、東洋人のあいまいな直感、これ

らが一つに溶け合わさった結果が八雲の天才と魔力なのである。彼の著作に見られる、エキゾチックな情感は純粹の英国人、フランス人、あるいはいかなる国の人の著作にもないものである。

父母の離婚後に、英国やフランスのローマ旧教の学校に入ったが、宗教とは馴染まなかったことについて、グールド宛ての手紙を引用して述べている。

大叔母の破産で、16歳の時にロンドンで働いた様子については、「星」の文章が描写していると述べ、この点は田部氏の指摘とは異なっている。

以後、シンシナティに行く途中でノルウェイの少女に会った経験を、35年後に「私の最初のロマンス」という文に書いたこと、二十余年の間さまざまな仕事をして苦勞したこと、ゴージェ、モーパッサンの最初の紹介者になったことなどアメリカでの生活を記すが、この時代の著作の題名は挙げていない。

ところが、田部氏も樊仲雲もふれていない伝記的事実として、黒人女性との恋愛について、次のように述べている。

小泉八雲は生まれつき女性崇拝者であった。彼の漂泊の生涯の大部分はもとより苦しいものだったが、甘い味も乏しいわけではない。彼の最初の女性は黒人の女性だった。シンシナティで新聞記者だった時に、重病になり、この女性が親切に世話をしてくれ、病気の回復後に正式に彼女と結婚した。白人は、白人と黒人との通婚を人倫に背くことだとしていたので、八雲はこのために新聞社を辞めることになった。小泉八雲が一時の感情に動かされて人々の怒りを買うのも構わずに黒人女性と結婚したのは彼の本領を發揮していた。ラテン人は感情

のまま疾風のように行動する。まもなく、彼は日本に移り、黒人女性を忘れてしまい日本の女性と結婚し、自分の姓名や国籍も捨てて、妻の一族と暮らすことになる。

以上の記述にはいくつか誤りが見られるが、当時の中国ではこのように紹介されていた。日本で書かれた紹介の記事とやや違う姿勢がうかがわれるのである。同じことは、その交友関係についてふれた箇所にも見られる。

交友の面でも、小泉八雲は最も反復常なき人だった。仲が良い時には、天まで持ち上げるが、仲たがいた時には路傍に捨ててしまう。若い頃に交わった友人も、晩年にはつぎつぎと捨ててしまった。彼自身の妹にも親しげな手紙を送っていたが、後には急に中絶してしまう。妹が手紙を送っても空の封筒を送り返す。ある人の話では、幼時における家庭生活の苦痛を思い出さなくて、それを連想させるものを断ち切っていたのだそうだ。

これらの叙述は、短い文章の中で印象深い点だけを述べて、八雲の姿を読者に示そうとしたものであろう。

伝記を書き、書簡を編集したビスランドについては、ゲーテやルソーの場合と比較して八雲が終始変わらない態度を取ったこと、彼女から精神的な影響を受け、彼女に与えた手紙は詩情溢れたものであることなどを述べ、八雲の伝記の中ではケンナードのが詳細であるが、力強く、簡明で生き生きしているビスランドの伝記には及ばないと評価する。

日本に来てからの生活については、思想、習慣が日本式になり、日本人が洋服を着たり英語を話すことを嫌い、夫人には英語を教えるようせず、逆に自分が着物を着たり、日本語を教わったり、日本の物語を聞くのを好み

日本の古い生活に芸術的な意味を見い出していることを述べる。

八雲の著作については、書簡が最も上品だと述べ、日本人の眼を論じた、ある友人宛ての手紙と、その文学的主張をのべたチェンバレン宛ての手紙の一部を引用しながら、ふだんの文章は何度も推敲してあまりにも芸術的にすぎるが、手紙は多忙の中で書かれていて、自然な調子と素朴で飾りがなく、彼の情熱、幻想、偏見が現れ、英国のステイーブンソンの「サモア書簡」に肩を並べると評価している。

日本に関する著作については、自分は日本に関して研究していないので批評しようとは思わないと述べながら、次のように評価している。

『日本瞥見記』と『東の国から』を読むと最も面白い小説を読むよりも面白く感じる。『日本瞥見記』の中的一篇「舞妓」はすでにフランス語、イタリア語、ドイツ語に訳されていて、フランスの雑誌「ドゥ・モンド」では世界で最もすばらしい愛情物語だと推奨していた。『東の国から』の「龍女」や「石仏」の諸篇はまったく散文詩であり、その悠長な調べと特異な情景から読者は深遠な感じを受ける。その文章について言えば、これらの作品は小泉八雲の作品の中でも最も美しいものであり、表面的に見れば、それらは平易で流暢で、苦勞せずに書かれているのだが、実際は一字一句何度も推敲を重ねられているのである。

その推敲の様子を八雲自身が「私の書物は毎頁とも5、6回は手を入れる」と述べたチェンバレン宛ての手紙を引用し、八雲の流麗な文章をこれまで読んで、それほどに苦勞しているとは思ってもよらなかった、その作文の方

法は学ぶに値する、と朱孟実は注意を促している。

八雲の文学講義については、実用的な観点から東洋の学生には最も良い著作だと評価しているが、例のアースキンの評価については次のような見解を示した。

これは八雲の価値を重視した言葉であるが、褒めすぎであろう。コウルリッチは英国ロマン派文学の開祖であり、八雲はロマン主義に育てられた驕児にすぎない。創造力、学識と深奥の点ではコウルリッチの敵ではない。彼のロマン主義は感覺中心主義(sensualism)にひどく偏っているため、時には偏狭になりやすい。ギリシャ文学についてよく知らないのに、古典主義の真の精神が分かっていない。『文学の解釈』の第3章「古典主義とロマン主義」では、古典文学を規則を厳守する文学としているが、これは明らかに古典主義と18世紀の新古典主義とを混同していたのである。

朱孟実はこう述べる一方で、小泉八雲は文学批評家の中での闘将であり、その講演集が多くの入門書の中で最良のものであり、初学者だけでなく文学の教師も多くの教授法を学ぶことができるとも評価している。

文学の教授法は中国の学校教師たちに最も欠けていることである。…中国の学生が日本の学生と異なる点は、外国文学に対する態度である。日本の学生は外国語を話せないけれども、外国文学に対して中国の学生よりも力を入れて読んでいる。中国の学生は外国語を話すことしか学ばず、日本の学生は外国文学にかなり興味を抱いている。これは小泉八雲の功績としないわけにはいかない。

このように、八雲から日本の新しい文学者

が多く教えを受けたこと、学生たちにはかり知れない影響を与えたことを指摘して、八雲がその地位を日本文学においていつまでも保っているだろう、と朱孟実はその文を締めくくっている。

この朱孟実は、近代中国において美学者として著名な朱光潜のことである。文の末尾に掲げられた八雲の著書と伝記はすべて英文の題名であり、これらの資料をもとにして書いたものと思われる。

したがって、その伝記に関する事実についても、著作の評価についても、その歴史的な限界を免れないかもしれないが、文の末尾で主張していることで明らかのように、八雲の著作から近代中国の学ぶべき点は何かということが示されていると言えよう。

このことは、Ⅲの作品目録でまとめた八雲の中国語訳とも関連している。つまり、単行本でも雑誌に発表されたものでも、日本に関する作品はほとんどなく、その文学評論が大部分であり、朱孟実も樊仲雲も八雲の中国に関する翻訳や文章はほとんど無視しているのである。

## Ⅱ. 『中国怪談集』をめぐって

日本では『怪談』を始めとして八雲が日本について書いた著作に対して大きな関心が寄せられているが、中国では著作全体に占める割合が違うためか中国に関する八雲の著作に対してほとんど注目していない。

『中国怪談集』についても、樊仲雲は「この小説は当時の読書界でたいそう歓迎されて彼の文名が全米に伝わった」と述べているにすぎない。

1928年になり、ようやくこの作品について、

趙景深の「小泉八雲、中国の幽霊について語る」<sup>15)</sup>という文章が発表された。

趙氏は最初に英文の題名と出版社を挙げてから、こう述べている。

小泉八雲は確かに私たちの良き友である。彼は西洋の文学を私たちに紹介し、特に英国の詩歌について一句一句ずつ解釈してくれ、私たちがよけいな模索をしないで進むようになった。同時に東洋の文学を本国と英語圏に紹介した。この『幾個中国鬼』

(“Some Chinese Ghosts”の中国語訳名)は、彼が書いた美しい中国の物語である。…(各篇の)題目はたいそう美しく、その内容はいつそう珠玉のごとくで、ウォルター・ピータの散文に近い。…もしも私の推測にまちがいなければ、小泉八雲はこの本で中国を代表させようとしたのだろう。

このようにこの本を高く評価した趙景深は、その6篇の物語の中でも「孟沂のはなし」が最も美しく、クラーク等の『世界短編小説傑作集』にも選ばれたことがある、と言う。

この物語は『古今奇観』の第34回「女秀才が花を移植し木を接ぐ」のまくらにあたる話に取材したものである。しかし、坊刻本は商務本と異なり、この話がなかったが、後に商務本を探して見つけた。商務本と小泉八雲の文章を比較すると、まったく訳文ではなくて、小泉八雲自身の創作となっている。「小泉八雲がこの物語をこのように美しく書いたのは、我々中国にとって光栄なことだ」と霞村兄が言ったのもっともなことである。

次に、孟沂が成都の郊外で美人と知合い、毎晩会っているが、後にその美人が唐代の女流詩人薛涛の霊魂だと分かるという、この話のあら筋を紹介してから、こう述べている。

もともとの筋はきわめてありふれたものだが、小泉八雲はたいそう細やかに描写していて、*ボツガツチゴ*のような物語から近代小説になっている。孟沂が薛濤に初めて会う一節を比較すれば、小泉八雲が古い遺物に新しい生命を吹き込んだことが分かるのである。

これに続けて、『古今奇観』の原文100字余りを示して、その書き方が事実を述べるのに記帳みたいで描写がないこと、古くさい考えが見られ英語に訳したら物笑いになること、短い文の中で三度も観察の視点が変わることに不満だと述べる。最後の点は、初め「袖の中から銀を地面に落とした」と孟沂の側から描き、次に「孟沂に返した」と美人の側から叙述し、また「孟沂は笑って受取り、礼を言って別れた」ということを指す。

これに対して、「小泉八雲は小説の方法で細かく描写し、古い考え方を除き、終始孟沂の側から叙述して読者を混乱させていない」と褒め、最後に、趙景深は八雲の文章を中国語に訳して自己の指摘が正しいことを証明しようとする。

このような趙景深氏の文章が書かれてから四十年後に、森亮氏も「ラフカディオ・ハーンの再話文学」の中で次のように述べられている。<sup>16)</sup>

華麗な文体や擬古的文体を意識して用いることも、短編小説というジャンルでは成功する見込みが多い。…ハーンの『中国靈異談』は総じて華麗な文体を以て綴られているが、「孟沂の話」では殊にそれが著しい。明初の一青年が唐の女流詩人の霊と優雅な逢瀬を楽しむという話にはこの文体がぴったりだ。…原作そのものが一応完成した小説であるから、ハーンが試みた加筆は

「膨らます」加筆が中心で、それに後で問題とする内容変更の方法を併用して可成り出来のいい再話をつくり上げた。

森氏はこの後に、孟沂が美女に会いに行く場面を、原作とハーンの英文と対比しながら、近代の小説作者としてのハーンが苦心している点を説明されている。

森氏の文では「再話文学」としてのハーンの方法と特色について、加筆、内容変更、書き出しや結びの工夫、文体などから論じられていて、趙景深氏の文よりもずっと具体的で深められているが、「孟沂のはなし」についての指摘などは共通する点が見られ、引用の箇所も前後していることは興味深い。

なお、趙氏によれば、薛濤に関する伝説も多く、その幽霊の出現に関する記事は計敏夫の『唐詩紀事』に見られるとのことである。

「茶の木縁起」については、「この伝説も、おそらく中国に原話があって、それがのちに日本の年代に合わせてつくり変えられた」という八雲の解題に対し、中国での起源を見い出せず、『ダルマ伝』にも臉を切り取ることは出ていないと指摘するが、末尾の付記では、ダルマの臉が茶に変わったことが、ブラウンの『中国夜談』にも同じ叙述があると記す。

「織女の伝説」については、ジュリアンのフランス語訳による『感応篇』第34章を引用してから、後半の話は白鳥処女伝説と似ていて、おそらく『二十四孝図説』の中の董永の話だろうとする。

「顔真卿の帰還」については、そのあら筋を紹介してから、末尾に「神仙可冀」の4文字があり、『感応篇』第38章に見られるとのことだが、錦章図書局刊行の『太上宝筏図説』巻3第18頁の「所作必成、神仙可冀」の条には、清朝のことだけでこの話が出ていない。

以上2篇の出典は『太上感應篇』とのことだが、自分が買ったテキストには見い出せず、おそらく小泉八雲のもつづいたテキストは許鶴抄の旧本だろうと指摘する。なお、趙氏は、大臣の名をTehin Kingと記しているが、願真卿だとは分からなかったらしい。

「盜神譚」については、八雲の解題にあるダントルコールの叙述を引用してから、この話と「大鐘の霊」はあきらかによく似ていると指摘する。

「大鐘の霊」については、父親からの手紙を引用し、大鐘が「北京では俗に金頂と言い寺の名は臥仏寺と言い、あるいは碧雲寺の大鐘と言う。六月の朝の金頂は、北京郊外での盛会の場となる」と述べる。

最後に、趙氏は次のように述べている。

小泉八雲の真意は、『中国怪談集』を「詩のような散文」として書きたかったのであり、「言葉の美」に力を入れている。だから、物語の原材料がどうであろうとも、やはり鑑賞に値する書物なのである。

したがって、趙氏の真意も八雲の物語の紹介にあったらしく、原語を探る点では八雲自身の解題以上の新しいことを示してはいないのである。

この文は、後に刊行された『民間文学叢談』<sup>17)</sup>に収められている。これについて、その後記で次のように述べている点は、すでによく知られた事実ではあるが、注目すべきことであると言えよう。

最後に説明しなければならないのは、旧作中の「小泉八雲、中国の幽霊について語る」の一篇である。日本の作家小泉八雲がわが国の物語に取材して書き換えた書物について論じたものである。『古今奇観』に取材した一篇以外は、すべてわが国の古代の

民間伝説に取材している。当時この書は影響が大きく、しかも私が主に論じたのもわが国の古代伝説に関わることだったため本書に収めた。この他に、私が割愛するに忍びなかった重要な理由は、この小さな作品が魯迅先生の注意を引いたことである。小泉八雲の物語にある「大鐘の霊」は、俞葆真の『百孝図説』に出ているとのことだったが、当時、私の手元にはなくて、魯迅に貸してくれるように頼んだ。魯迅はその晩に手紙をくれ、人にことづけて本を貸してくれた。

趙景深は『童話学概論』や『民間故事叢話』を出版し、新中国になってからは大学教授になった民間文学の研究者であるが、当時は開明書店の編集者として魯迅と交渉のあった人である。

魯迅自身の「日記」によれば、1928年の10月31日の夜に趙景深が訪問し、「文学周報」一冊を贈呈したとのことである。<sup>18)</sup>ただし、この時に魯迅は趙景深と会わなかったために、後で次のような手紙を書いたわけである。<sup>19)</sup>

景深先生

さきほど『百孝図説』改訂版を調べたところ、炉に身を投じたのは、李娥だけでした。ただし軍器を鑄造するためであって鐘ではありません。どういふことでしょうか。ただいま、全冊お貸ししますので、全体的にご点検ください。——その挿絵の地面には、あきらかに数多くの軍器が見えます。

迅 啓上 十月卅一夜

全体的に点検してどのような結果が得られたのか、趙氏は八雲について二度とふれていないので分からないが、本を借りてから4日後には返却している。魯迅はまたその返事を出して、次のように述べている。<sup>20)</sup>

景深先生

ご返却いただいた本、ならびにお手紙、拝受しました。

外国人が中国のことをあつかうと、もとよりあやふやなところがありますが、『百孝図説』の作者の愈公もたいして「忠実」とはおもえません。たとえば「李娥、炉に投ず」を、彼は『孝苑』から引いている。この本を見たことはないが、早くともせいぜい明代の書物でしょう。すると、その故事はやはり古書に拠るものであるにもかかわらず、出典がない、——字句の大きな改竄さえないとは言えません。その記述をみると、李娥をねたにして名を挙げようという魂胆が見うけられます。さらに『呉地記』、『元和郡県志』、『太平寰宇記』などを調べれば、もっと早い出典を見つけることができるかもしれません。

魯迅 十一月四日

趙氏はなぜ魯迅に本を借りようとしたのだろうか。

その年の9月に魯迅は回想録『朝花夕拾』を出版している。魯迅はその後記で同書に収めた「二十四孝図」について補充する叙述を行い、『百孝図説』についてもかなり紙幅を費やしている。おそらく趙氏はこれを読んで借りようと考えたのではなかろうか。ただし、愈葆真を于宝成と表記していることから、後記が雑誌に発表された時には読んでいなかったらしい。<sup>21)</sup>

魯迅は趙景深の文章を読んで、その不十分な点を感じたのか、前年に愈について書いたためか、二度にわたって手紙で話題にしたことになる。

ここで指す外国人は小泉八雲を含むのであろうが、この後魯迅は八雲について次のよう

に言及している。<sup>22)</sup>

小泉八雲は中国ではもう多くの人が知っているのに、紹介するまでもあるまい。彼の三篇の講義は、日本の学生のために講義されたものであるから、私たちが読んでも、たいへん分かりやすい。その中にはとても研究に値する問題が含まれている。一般の人に分からないような文章は、すぐれた文学であろうか、ということである。もしも大衆が分からなくても良いならば、この文学は決して大衆のものではないだろう。

ここで指す講義とは、「トルストイの芸術論」、「トルストイの復活」と「トルストイの求道心」を指している。魯迅は雑誌の編集後記でこう述べたのであるが、同じ雑誌の次の号でも八雲について、こう述べている。<sup>23)</sup>

このことでは、日本は中国よりもずっと幸せである。彼らには日本の良い物を宣伝して、一方で外国の良い物を輸入してくれる外国人がいつもいる。英文学の面では、小泉八雲がその一人であり、彼の講義は、たいへん簡潔で分かりやすく、学生のことを考えている。中国における英語の研究は日本よりも遅くないし、接する英語の書籍は多く、学校での外国語も大部分は英語であるが、英文学に関するこのような講義は今まで出現していない。

「このこと」とは、中国在住の外国人が中国の現在の文化生活を紹介してくれないことを指し、彼の講義とは、「十九世紀のイギリス小説」を指している。魯迅のこの八雲に関する指摘は、前述の朱孟実の指摘とよく似ていて興味深い、もしかすると、朱の言及を下敷にしているのではないかと思わせられるほどであるが、魯迅の言葉からも近代中国で八雲が注目された理由が明らかにされていると言

えるであろう。

私の知る限り、魯迅と小泉八雲との関わりはこれ以外にないようであるが、八雲の作品は魯迅の関係した雑誌「北新」,「奔流」,「語絲」などに訳文が発表されていて、魯迅はよく知っていたものと思われる。しかし、八雲の本を購入した形跡は見い出せない。

かつて島根大学教授だった増田渉氏は魯迅に直接に教えを受けた唯一の日本人学生として有名である。面白いことに、増田教授は八雲が在住していた松江の近郊の出身である。増田教授はその専門が中国文学であるため、小泉八雲については、わずかに『日本瞥見記』の一部を翻訳されている<sup>24)</sup>だけで、八雲に関する文章は発表されていないようだ。

1931年に、魯迅と会った時に八雲の名が出たのだろうか。また、魯迅からの日本語の手紙でも話題にはされていない。今となっては、増田先生にお聴きすることができないのが残念である。

1992. 11. 30

### Ⅲ. 中国語訳小泉八雲作品目録

#### 1) 単行本

給志在文芸者	任白涛訳	亜東	28年
近代日本文芸論集	韓侍桁訳	北新	29年
西洋文芸論集	韓侍桁訳	北新	29年
文芸談(英漢対照)	石民訳注	北新	30年
日本及日本人	胡山源訳	商務	30年
文学講義	惟夫訳	聯華	31年
英国文学研究	孫席珍訳	現代	32年
文芸研究	惟夫訳	聯華	33年
文学的畸人	韓侍桁訳	商務	34年
文学十講	楊開渠訳	現代	35年
心	楊維銓訳	中華	35年

英国文学研究	孫席珍訳	商務	36年
英国浪漫詩人	孫席珍訳	現代	

#### 2) 雑誌

評拜倫		陳訳	
小説月報15-4			24年4月
小泉八雲論詩(摘自“In Ghostly Japan”)		従予訳	
小説月報16-1			25年1月
画猫的孩子		徐調孚訳	
文学周報162			25年3月
小泉八雲的文学講義		滕固訳	
小説月報17-9			26年9月
英文聖經之文学的価値		梁指南訳	
北新2-14			28年6月
最高底芸術之問題		侍桁訳	
北新2-16			28年7月
生活和性格之与文学的關係		侍桁訳	
奔流1-2			28年7月
雀鳥在英文詩歌上的地位		梁指南訳	
語絲4-30			28年7月
雀鳥在英文詩歌上的地位(二)		梁指南訳	
語絲4-31			28年7月
雀鳥在英文詩歌上的地位(三)		梁指南訳	
語絲4-32			28年8月
雀鳥在英文詩歌上的地位(四)		梁指南訳	
語絲4-33			28年8月
雀鳥在英文詩歌上的地位(五)		梁指南訳	
語絲4-34			28年8月
雀鳥在英文詩歌上的地位(六)		梁指南訳	
語絲4-35			28年8月
Erasmus Darwin		侍桁訳	
語絲4-50			28年12月
小説中神異事物之価値		石民訳	
語絲4-51			28年12月
関于聖誕節		関予訳	
朝花周刊4			28年12月

小泉八雲論托爾斯太	侍桁訳	文学和政見	杜衡訳
奔流 1 - 7	28年12月	新文芸 1 - 2	29年10月
小泉八雲論肯斯黎の希臘神話故事	張友松訳	路易斯僧及恐怖与神秘派	侍桁訳
春潮 1 - 3	29年 1 月	語絲 5 - 35	29年11月
英国的“謡曲”	石民訳	文学与政見	緯漢訳
北新 3 - 2	29年 1 月	華北日報副刊	29年11月
十九前半世紀英国の小説(講演, 一)	侍桁訳	Thomas Love Peacock	侍桁訳
奔流 1 - 8	29年 1 月	語絲 5 - 42	29年12月
中世紀最美的羅曼故事	綏昌訳	惡魔派詩人擺倫論評伝	陳甲孚訳
華北日報副刊	29年 2 月	国聞週報 6 - 47	29年12月
Bernard De Mandeville	侍桁訳	William Blake	侍桁訳
語絲 5 - 2	29年 3 月	語絲 5 - 46	30年 1 月
十九前半世紀英国の小説(講演, 二)	侍桁訳	論創作 (一至二)	石民訳
奔流 1 - 9	29年 3 月	北新 4 - 1・2	30年 1 月
十九前半世紀英国の小説(講演, 三)	侍桁訳	写実主義与理想主義	侍桁訳
奔流 1 - 10	29年 4 月	華北日報副刊	30年 1 月
William Beckford	侍桁訳	北欧散文家一般生	張源訳
語絲 5 - 7	29年 4 月	河南中山大学文学季刊 1 - 1	30年 1 月
文学与民意	張文亮訳	論創作 (三一五)	石民訳
北新 3 - 7	29年 4 月	北新 4 - 3・4	30年 2 月
論読關於文学の書	宋堯訳	Blake—第一個英国神秘家	侍桁訳
華北日報副刊	29年 5 月	語絲 5 - 48	30年 2 月
論古斯堪底納維亞の散文作家	宋堯訳	理想主義の将来	侍桁訳
華北日報副刊	29年 6 月	華北日報副刊	30年 2 月
杜爾斯泰の芸術学説	有熊訳	莎士比亞	馬彦祥訳
華北日報副刊	29年 6 月	万人雜誌 1 - 1	30年 4 月
對於杜爾斯泰の復活的解釈	有熊訳	欧州中世紀時代浪漫文学底最高美	陳樹雪訳
華北日報副刊	29年 6 月	民衆生活 2 - 4	30年 5 - 6 月
青柳	劉大傑訳	「文学的解釈」の結論	震孫訳
北新 3 - 13	29年 7 月	南開大学週刊47	30年
般生論	白丁訳	藤尼生	隱訳
華北日報副刊	29年 7 月	北平晨報学園80	31年 4 月
Christophev Smart	侍桁訳	浪漫派文学与古典派文学在風格上的	
語絲 5 - 22	29年 8 月		高雲雁訳
George Barrow	侍桁訳	新時代 5 - 5	33年11月
語絲 5 - 33	29年10月	英国短詩論	陸印泉訳

詩歌月報 2 - 1

34年10月

12) 同上書14頁参照

13) 同上書24頁参照

14) 朱孟実「小泉八雲」「東方雑誌」23-18 1926年  
9月15) 趙景深「小泉八雲談中国鬼」「文学週報」328 1928  
年8月

16) 「比較文学研究」15号 昭和44年

17) 趙景深『民間文学叢談』(湖南人民出版社 1982  
年) 287-290頁18) 『魯迅全集』第14卷(人民文学出版社 1981年)  
731頁

19) 『魯迅全集』第14卷(学研 昭和60年) 402頁

20) 同上書403頁

21) 魯迅の『朝花夕拾』後記は1927年に雑誌「奔原」  
に発表されている。22) 『魯迅全集』第7卷(人民文学出版社 1981年)  
174頁

23) 同上書178頁

24) 増田涉訳「湖上の夕映」『斐伊川史』(斐川町 1950  
年) 所収

## 注

1) 葉靈鳳『讀書隨筆 一集』(三聯書店 1988年)  
25頁 「重誦之書」2) 黄俊東『書話集』(波文書局 1973年) 121-131  
頁 「文壇伝奇人物小泉八雲」3) 従子訳「小泉八雲逸聞」「小説月報」16-3 1925  
年3月4) 樊仲雲「小泉八雲」「小説月報」16-16-1 1925  
年1月5) 厨皮白村『小泉先生そのほか』(積善館 大正8  
年) 21頁参照

6) 同上書3頁参照

7) 同上書11頁参照

8) 同上書5-7頁参照

9) 同上書6-7頁参照

10) 同上書7-8頁参照

11) 同上書8頁参照